

助成番号

15-245

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】戴寧(タイネイ)

【所属】(助成決定時) 首都大学東京・人文科学研究科・社会行動学専攻・社会人類学分野

【研究題目】

日中国際児のアイデンティティ形成および社会化過程に関する社会人類学的研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、日本人と中国人との国際結婚によって誕生したいわゆる日中国際児のアイデンティティ形成および社会化過程を、従来の教育民族誌が対象としてきた学校という限定されたフィールドのみならず、文化交渉の場の最小単位としての『家庭』にも目を向けることで、多角的に捉えなおすことを企図している本研究の目的は、より具体的には、以下の二点に要約することができる。第一に、日中国際結婚家庭における長期のフィールドワークを行い、親の採る教育戦略だけではなく、その教育に対する国際児自身の反応や選択のあり方を析出することである。そこには、親の教育戦略との偏差や齟齬があるはずであり、そうした部分を可能な限り微細に記述していく。ただし、国際児らの反応には、受動的な側面と能動的な側面の双方があることも予想されるため、両者の相補的な関係についても併せて検討していく。第二に、さまざまな境界が同居・混在する国際家庭における親子関係の諸相を観察・記録する作業から、理念先行型の多文化共存社会とは異なる、新たな異文化混淆モデルを導き出したい。

【研究の内容・方法】(800字程度)

上述した目的を意識しつつ、国際結婚家庭の親子関係をめぐる日常的な実践のフィールドワークを行う必要があることに至った。それはいくつかの側面があり、具体的に以下のように研究を進めてきた。①調査対象の家族構成、両親の学歴、両親の職業、言語状況、外国出身の親の来日年数、社会的ネットワーク、日本社会への満足度等の基本情報を確認する。国際結婚家庭の採る教育戦略は国内外の政治、経済等に影響され、常に変化の途上にある。つまり、国際児の能動性・主体性を析出させるために、両親の文化的・歴史的背景をより包括的に分析した。②家庭内使用言語や外国出身の親との間で使用する言語、家庭外使用言語の一致性を観察記録する。二つ以上の言語の運用、維持状況およびそのスイッチングを手掛かりに記録した。③家庭環境を観察する。具体的に、外国にいる親族との関係及びコミュニケーションの現状を把握し、また、国際児の日常的行動を把握すると同時に、談話分析の資料となりうる親子間コミュニケーションを記録する。年中行事の実践および生活様式を観察する。国際児の自己形成は、彼ら自身さまざまな経験における周囲の人々との日常的な相互作用の過程において確立する。意識的および無意識的な行為を考察するために、厳密な調査項目は設定せず、国際児がいかに「自己」を想定し、「他者」との境界線を引くのかを明らかにした。

また家庭内での実践に基づく観察は断片的であり不十分だと見なしたため、「国際結婚を考える会」と中国人母親の会「美ママ協会」に協力してもらい、公共の場での実践を観ることができた。具体的な内容として、それらの団体から国際結婚の現状に関するパンフレットや雑誌、内部資料等を収集・分析するとともに、担当者にインタビューすることで、国際結婚家庭および国際児が抱えてきた問題を明らかにし、その動向の最新情報を得た。

【結論・考察】(400字程度)

参与観察に基づき、先行研究を再検討したうえで、境界空間に位置付けられ、顔の見えない日中国際児の主体性・能動性を考察したため、国際児とは日本社会の多元化によって、「日本人」対「外国人」という単純な図式に回収されない、複雑な生活世界に生きている子どもたちであることが示された。日中国際結婚家庭で育つかれらは、両親双方のどちらか一方に受動的に変容、同化するのではなく、自らの置かれた状況を解釈し直したり、行動によって状況を換えたりしながら、自らの「社会的資源」である日中文化の混淆を肯定的なものやメリットに能動的・主体的に変えていこうとすることが確認できる。

また、多くの日中国際児たちが、自分の成長につれ「私ってなに人」という質問にぶつかり、その時期や期間は人によって異なるが、それは両親の教育やしつけの影響というより、むしろ個々人の経験を通して、家族や周囲の人との相互作用の中に見出すものである。国際児たちは、親の教育方針に影響を受けるけれども、そのすべてを受動的に受け入れているわけでもなければ、反対にそこから完全に自由にアイデンティティを作り上げるわけでもない。親の教育戦略が国際児のアイデンティティ形成に及ぼす影響を強調することは、子どもたち自身の戦略や主体性・能動性を軽視することになるだろう。